H31.3.20　市議会全員協議会 資料№3-1

H31. 2. 25　広域連合議会全員協議会

リニア時代に向けた新施設の整備に関する「基本的考え方」（案）

2019年2月

南信州広域連合事務局

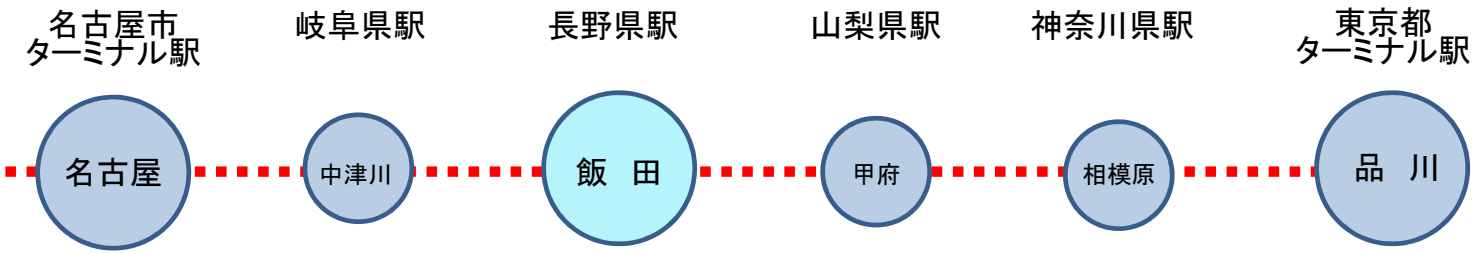
○日本・世界における伊那谷・南信州

・リニア時代に向けては、「スーパー・メガリージョン」「ナレッジ・リンク」の中で、
日本全体さらには世界に対して存在価値を発揮できるか、という視点が不可欠

伊那谷・南信州全体で
「田園型の学術研究都市」
を目指す

○リニア沿線における伊那谷・南信州＜横軸＞

・リニア沿線都市では「コンベンション」を強く意識した構想が進んでいる
連携と差別化を考え、「長野県らしい・伊那谷らしい」アプローチが必要



（名古屋駅周辺）
・名古屋国際会議場 等

（名古屋港）
【移転計画】
・名古屋市国際展示場

（中部国際空港周辺）
【2019年開業予定】
・愛知県国際展示場

（リニア駅周辺）
【経済界から】
・国際展示場
・メッセ　など

（リニア駅周辺）

・産業振興と
人材育成の拠点
（エス・バード）

・＋α

（リニア駅周辺）
【計画】
・コンベンション観光
交流施設
・国際展示場
・産業振興施設 等

（リニア駅周辺）
【計画】
・国際会議場
・屋内又は屋外競技場、
トレーニングセンター棟

（品川駅）
【計画】
・駅直結の複合的機
能
（商業、業務、ホテル、
コンベンション）

（東京周辺）
・東京国際フォーラム
・東京ビッグサイト　等
・パシフィコ横浜　等

○長野県・伊那谷における連携軸＜縦軸＞

（伊那谷の各種施設等との連携例）

リニア効果を如何に県内各地・伊那谷全体に広く波及させるか、さらには、三遠南信連携を意識した「縦」の連携の視点を持って、リニア駅周辺整備や「新施設」を考える必要

信州大学農学部

南信工科短期大学校

中央アルプス

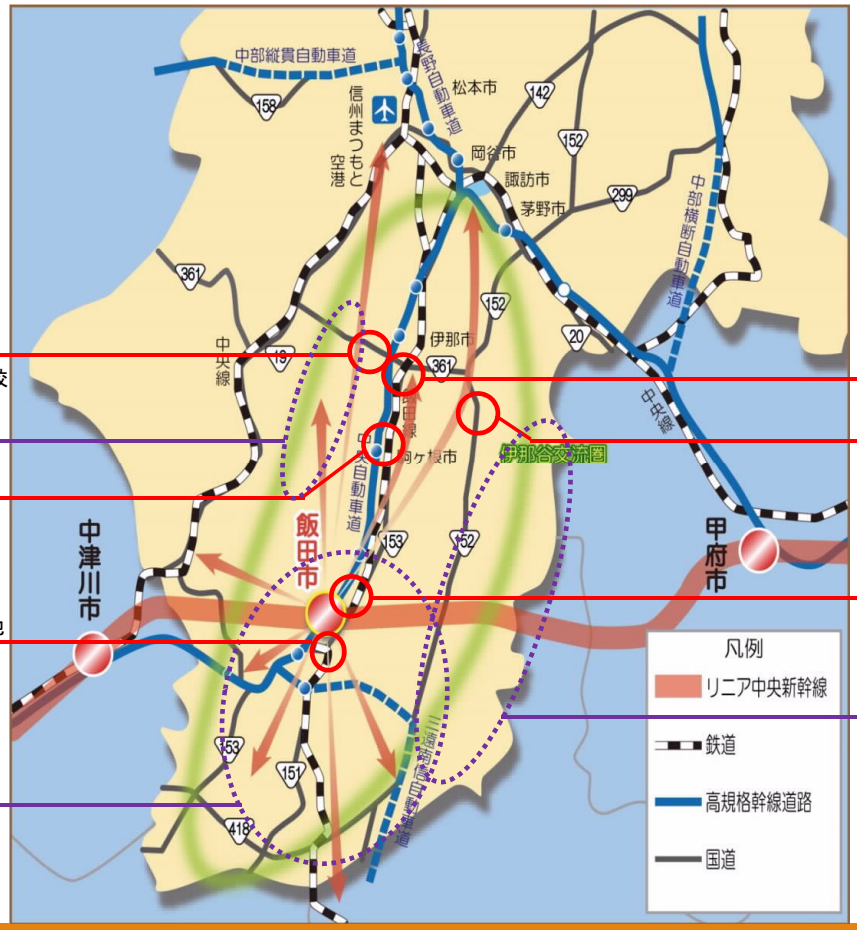
ふるさと大使村

看護大学

飯田市中心市街地

飯田女子短期大学

伝統芸能



伊那文化会館

自動運転・ドローン社会実験

産業振興と人材育成の拠点（エス・バード）（信大航空機システム共同研究講座）

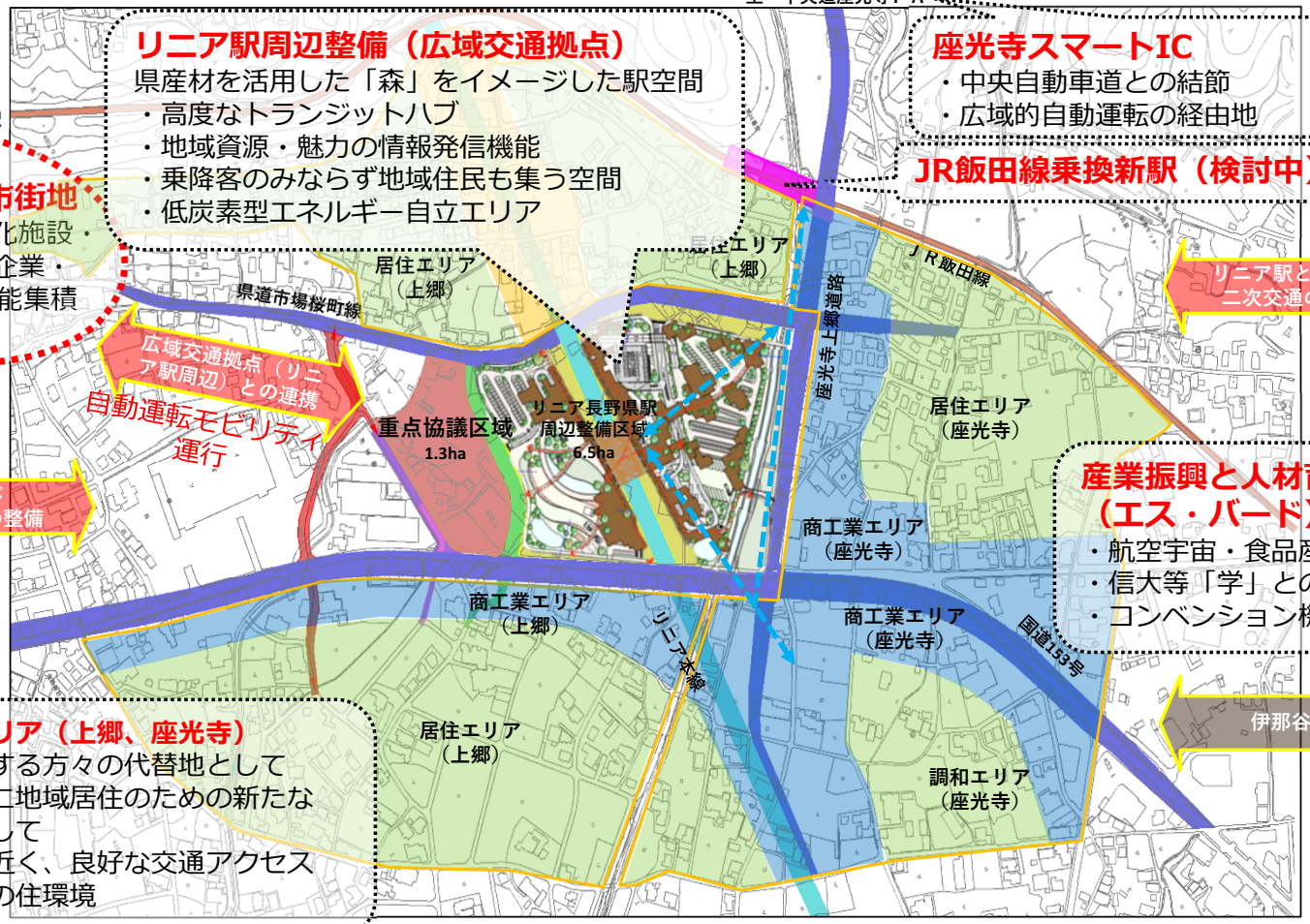
リニア駅周辺整備（県産材を活用した駅空間）

南アルプスジオパーク

+α

○リニア駅周辺におけるまちづくり

「田園型の学術研究都市」のコアエリア



リニア駅周辺整備（広域交通拠点）
県産材を活用した「森」をイメージした駅空間
・高度なトランジットハブ
・地域資源・魅力の情報発信機能
・乗降客のみならず地域住民も集う空間
・低炭素型エネルギー自立エリア

座光寺スマートIC
・中央自動車道との結節
・広域的自動運転の経由地

JR飯田線乗換新駅（検討中）

飯田市中心市街地
宿泊・飲食・文化施設・
行政・商業・企業・
住居等 都市機能集積

広域交通拠点（リニア駅周辺）との連携

自動運転モビリティ運行

リニア駅と結ぶ
道路ネットワークの整備

昼神温泉ほか飯田下伊那地域

リニア駅と伊那谷を結ぶ
二次交通の利便性向上

産業振興と人材育成の拠点（エス・バード）
・航空宇宙・食品産業の振興
・信大等「学」との連携拠点
・コンベンション機能

伊那谷との連携

伊那・駒ヶ根地域

新たな居住エリア（上郷、座光寺）
移転をお願いする方々の代替地として
移住・定住・二地域居住のための新たな
居住エリアとして
・リニア駅に近く、良好な交通アクセス
・環境配慮型の住環境

○南信州地域を取り巻く状況と問題意識

・人口減少、少子高齢化、若者の流出という地域課題にどう向き合うか

・リニアが通ることによる当地域の立地ポテンシャル（３大都市圏からの時間距離の短縮、アクセスバランスの良さ等）をどう活かすか

・リニア開通により形成される「スーパー・メガリージョン」「ナレッジ・リンク」の中で、日本全体さらには世界に対して存在価値を発揮できるか

○施設整備に対する意見

・外から人を呼び込むだけでなく、地元住民が利用できる施設を考えるべきではないか

・初期投資や運営コストと地域の負担も併せて検討する必要がある

・リニアで短時間に東京・名古屋に行けるようになるのだから、大都市圏にあるような施設は必要ない

・リニア沿線の甲府、中津川でも同様な検討をしているはずであるから、競合しないように、差別化・棲み分けをしっかりする必要

○考える視点

・リニア時代には、時間距離としては大都市圏の一部でありながら、自然環境と良質なコミュニティを基盤として「豊かな暮らし」ができることが当地域の最大の魅力（強み）

⇒「暮らしの質」を高めることが若者の回帰、移住・定住の促進につながる

⇒<u>この地域の「暮らしの質」の向上に資する施設を考えるという視点</u>

・外から人を呼び込むためにコンベンション施設を整備すべきという考え方もあるが、コンベンションは人を呼び込む「手段」の１つに過ぎない。

⇒「施設ありき」でコンベンション誘致に汲々とするのではなく、

<u>当地域を訪れる必然性を創る（価値を発信・創造する）ことが肝要</u>

◎「コンベンション」「屋内体育施設」という枠にとらわれず、
この地域の「暮らしの質」を向上させ、
国内外の人が注目する「価値を発信・創造する」ような
「見たことのない(県内唯一の）施設」を創るつもりで考える

〇暮らしの質の向上
⇒「地域課題の解決」＋「未来への期待（ワクワク感）」

〇価値の発信・創造
⇒・ここにしかない文化や住民活動、地域づくり等を全国・世界に発信
・「学びの土壌」　×　大都市圏や世界との交流　＝　新たな価値の創造

〇「見たことのない」
⇒・既成概念にとらわれない
・顕在化していない（潜在的な）住民ニーズを汲み取る
※「奇抜なもの」「大規模なもの」といった考え方ではない

施設整備の大きなビジョンは、

◎ここで暮らすことを自慢したくなる「誇りや自信を創造する」

◎国内外から人が訪れたくなる「価値を発信・創造する」

加えて、コスト意識（事業性）は、イニシャル・ランニングともに極めて重要

⇒民間事業者の参画を積極的に追求する

○ビジョンの具体化

☞まずは「どんなことがしたいか（使い方・コンテンツ）」を考える
☞その際、その運営の担い手となり得る主体と協働で考える

・「住民の誇りや自信を創造する」「国内外に価値を発信・創造する」ために、
具体的にどんなことができる施設にしたいのか（使い方・コンテンツ）を考える
（「つくる目線」ではなく、「つかう目線」で考える）
・実際にリニアを使いこなすこととなる世代（高校生など）や外からの利用が想定される
団体などからの意見を聴く

・施設の運営（或いは建設）の主体となり得る者と協働で考える
（民間の知恵と活力を積極的に借りる）　※長野県との協働は大前提として
⇒有識者、利用団体だけでなく、民間事業者にも検討に加わってもらう
・PFIを含む財源調達の手段と併せて、運営・マネジメントの在り方も検討する。
施設の運営（或いは建設）の主体となり得る民間事業者と協働で考えることにより、
「あれもこれも」の「無責任プラン」とならないように、事業性を踏まえて機能・規模を
精査していく

○使い方・コンテンツ①（スポーツ文化の醸成）

【プロスポーツに触れ、本格的にスポーツを学ぶ】
○単に住民の「観る」機会を増やすというだけではなく、子供・青少年がプロスポーツに触れ、触発される場を創る。
○学校規模に関係なく、子供たちが各種スポーツを本格的に学べるよう、市町村・校区を超えたクラブチームを結成し、その活動拠点となる施設
○リニアの利便性を活かして、都市圏からプロの指導者も訪れて指導。ワールドクラスの選手の輩出を目指す（「ゴールデン・エイジ」の積極的育成）
○週末には、プロスポーツのリーグ戦や大きな学生スポーツの大会も開催
○ラグビーやサッカーなどの屋外スポーツのクラブチームもクラブハウスを置いて、トレーニング等に利用。伊那谷各地のグランドをサテライトとして結ぶ（順次、芝生化）

【パラスポーツの国内拠点となる】
○パラスポーツ（障がい者スポーツ）の国内拠点となり、ユニバーサル社会の先進地を目指す

【日本一の健康長寿の里を目指す】
○シニアスポーツの拠点となり、健康寿命の延伸に寄与
○伊那谷アグリイノベーション推進機構（信大農学部ほか）やメディカル・バイオクラスター（南信州・飯田産業C）、バイオ・ビレッジ（民間）と連携
○健康長寿を研究する企業、特徴的な取組をしている自治体、医療機関、研究機関等と協働して研究

○使い方・コンテンツ②（伝統文化の発信、芸術文化・娯楽の享受）

【伝統芸能・民俗芸能を国内外に発信】
○地域内外の人々が伝統芸能・民俗芸能（祭り）を鑑賞し、学ぶことができる場
・獅子舞や地歌舞伎、人形浄瑠璃、無形文化財の民俗芸能（祭り・踊り）などが定期的に公演
・地域内の人だけでなく、リニアを利用して都市圏の人々も鑑賞
・体験を通じて、担い手、支え手が育つきっかけに

【本物の芸術や娯楽に接する機会を創る】
○単に住民の「観る」機会を増やすというだけではなく、子供・青少年がホンモノの芸術文化や娯楽に触れられる場を創る。
○文化系の活動に取り組む人々（特に若者）が切磋琢磨し、発表する場
○リニアの利便性を活かして、都市圏からプロの指導者も訪れて指導
○時には、大規模なイベント・コンサートも開催
○人形劇・演劇などのほか、バレエ教室やダンススクールなども

○使い方・コンテンツ③（「小さな世界都市」を目指して）

【当地域の「公民館活動」を国内外の人が学ぶ場】【企業研修の一大拠点を目指す】
○当地域の「公民館活動」を学びに訪れる大学・研究室らのフィールド・スタディの拠点（ex.学輪IIDA）
○大学生・研究者らと当地域の住民が共に学び、地域課題の解決を図る
○リニアを利用して、海外からも「kouminkan」を学びに訪れる（ex. JICA研修、レガスピの事例）
○立地を生かし、企業研修の国内有数の拠点を目指す
○JICA駒ヶ根訓練所及びJOCA（（公社）青年海外協力協会）（駒ヶ根）とも連携
○文部科学省の社会教育部門又は関連団体の本部を誘致

【環境問題解決・環境学習の世界的拠点】
○飯田市が「環境モデル都市」であることや再生可能エネルギーの活用が盛んである地域特性を活かし、国内外の環境に関する団体や学会が集う拠点となる
○ESDやSDG’sを学ぶ拠点となる
（ESD活動支援センター（本部：渋谷、中部地方センター：名古屋）との連携/誘致）

【国際的に通用する若者を育てる】
○地域の歴史・文化を学ぶとともに、外国語を気軽に学べる
○海外からの留学生が日本の文化や日本語を学びながら、地域の若者と交流
○ITの活用により、地域の若者が日常的に世界各国の同世代と交流
○伝統芸能や人形劇を通じた国際的な交流の拠点
○JICA駒ヶ根訓練所及びJOCA（（公社）青年海外協力協会）（駒ヶ根）とも連携（「大使村構想」と連動）

○コンセプトまとめ

・リニア時代の「スーパー・メガリージョン」「ナレッジリンク」の中で、
他地域とは異なる学術研究都市を目指すには、当地域の強みである「学びの土壌」を活かすべき
（＝「田園型の学術研究都市」構想）
・長野県・伊那谷全体さらには三遠南信地域まで含む「縦軸」の連携において、
伝統文化・民俗芸能は重要なコンテンツ
・「つかう目線」で考えた使い方・コンテンツは、「学び」をキーワードに整理できる

・スポーツや芸術文化を「学ぶ」環境を充実させることで、住民（特に若い世代）の誇りや自信を創造する
・この地域の伝統芸能や文化活動など「学ぶ」に値する価値を国内外に発信する
・公民館活動に代表される「学びの土壌」をベースとした交流と体験を通じた能動的な「学び」により、新たな価値を創造する
＊「一か所完結型」ではなく、圏域内外の施設と連携して一体としてビジョンを実現
（＝ベースキャンプ）

当地域としては、リニア時代の「新施設」として

「学びの県づくり」の拠点となるような
社会教育（スポーツ・文化・芸術・芸能）の拠点施設
信州『学びのベースキャンプ』（仮称※）

を目指したい

（※コンセプトや名称は今後さらに議論を深める）

○施設の具体的イメージ

※ここでは、「周囲を観客席で囲まれた多目的利用可能な平らな床面」を「アリーナ」と表現している

・「ベースキャンプ」として圏域内外の施設と連携して一体としてビジョンを実現していこうとするならば、その施設イメージは「アリーナ※機能を中心とした複合施設」ではないか

【主に次のようなコンテンツを担うことを想定して「アリーナ機能」が必要と考える】
・子供・青少年がプロスポーツに触れ、各種スポーツを本格的に学べるような市町村・校区を超えたクラブチームの拠点となる
・リニアの利便性を活かして首都圏からプロの指導者が訪れ、ワールドクラスを目指せる環境を整備
・パラスポーツ、シニアスポーツ（健康長寿の里）の一大拠点となる
・時には、大規模なスポーツ大会やイベント・コンサート、コンベンションを開催
・獅子舞や地歌舞伎、人形浄瑠璃、無形文化財の民俗芸能（祭り・踊り）などを国内外に発信

連携して、前述の「使い方・コンテンツ」①～③を実現
（＝地域の「暮らしの質」を向上させ、国内外の人が注目する価値を発信・創造）

産業振興と人材育成の拠点（エス・バード）・・・ 500人規模までのコンベンション・展示会、多数の会議室を要する学会等
飯田文化会館（建て替え予定）・・・引き続き当地域の芸術・文化の拠点となる劇場型ホール
圏域内外の体育施設
圏域内外の文化施設
圏域内外の公民館　　など

○施設検討に当たっての留意点

・連携する施設との機能の重複を避け、過剰な投資とならないよう棲み分けを図る

・相当規模の駐車場は必要（少なくとも当初は（モビリティ革命はあるとしても））

・圏域内外との連携を考えている以上、アクセス性（リニア駅、幹線道路、JR飯田線）は重要

○他地域・機関との連携

・圏域内外の体育施設・文化施設・公民館と、移動手段も含め、有機的に連携する

・宿泊機能については、近接・近隣に民間投資を促すとともに、既存のホテル・旅館との連携を可能にする交通連携を検討する。特に、宿泊・飲食機能が集積している飯田市中心市街地（丘の上）や昼神温泉、さらには伊那・駒ヶ根との交通連携については重点的に検討する。
また、この地域の特色である農家民泊も「学び」の要素として積極的に連携させる

・圏域外からの利用者に対しては、周辺地域にある観光リゾート機能、農林業を含むホンモノ体験のアクティビティ、南アルプス・中央アルプスなどとの連携により、広域的な波及効果の拡大を図る
・ 観光や物産などの地域資源に関する情報発信機能は、リニア駅周辺整備において主に担うが、「学び」のアクティビティが特徴となっている「銀座NAGANO」のような要素を複合させることも検討

・国内外の関係機関と積極的な連携を図る。また、東京都内・名古屋市内に立地している機関については、誘致を視野に入れる

○今後検討を要する論点

・施設の建設・運営の方式（公設民営、民設民営ほか）

・アリーナの座席数をはじめとする施設規模

・利用形態（興行主体か住民利用主体か、など）

・立地条件（必要面積、アクセス、法的条件など）の整理と候補地の絞り込み

・概算事業費、財源

・開設時期（目標）